

Base Management (マニュアル 4.2.2.1)



Optimizer は、EBU Tech 3276-E, AES TD 1001.1.01-10, ITU R-775-1, SMPTE 202M, ISO 2969 (curve X), SMPTE 222Mなどの規格で定義されている、放送、映画、音楽業界で使用されているベースマネージメントの設定に対応するように設計されています。

重要な注意:



- Optimizer は、サブウーファーを含む、すべてのスピーカーのレベルを常に調整します。
- **+10dB on LFE input (S1)** について:
 - プロフェッショナルな環境では、サブウーファーの推奨Calibration レベルを考慮し、最適なゲイン構成を実現するために、必要に応じてこのオプションを使用する必要があります。
 - LFEチャンネルは -10dB のレベルオフセットをもって収録されています。そのため、再生システムでこのオフセットを補正する必要があります。他に補正する機器がない場合、このオプションを使用する必要があります。
- この設定は、ベースマネージメントの on/off とは無関係です。

Please note:

- +10dB LFE input(S1) は、Bypass の影響を受けません。

- Bypass が必要な場合は、右上の "Bypass" スイッチを使用せず、LFEを適切に設定した "Bypass Preset" を作成してください。
- ゲインの構成を最適化するために、Calibration 前にLFEアンプを他のチャンネルに対して+10dB SPLに設定してください。Optimized用 Preset では "+10dB on LFE Input "を有効にし、Bypass用 Preset では無効にしてください。

ベース マネージメントのモードには 下記があります：

- **Off**: ベース マネージメントが行われなことを意味します。つまり、メインスピーカーは各チャンネルの低域成分を再生し、サブウーファーは LFEチャンネル のみを再生します。
- **On**: メインスピーカーの各チャンネルの低域はクロスオーバー周波数でフィルタリングされ、各チャンネルのミックスがサブウーファーに送られます。注意: 業界標準では、LFE チャンネルはフィルタリングされません。信号は フルレンジ でサブウーファーに送られます。
- **Mono**: 標準的なベースマネージメント モードで、同じ信号がすべてのサブウーファーに送信されます。
- **Stereo**: このベースマネージメントは ステレオのサブウーファーを使用する場合に使用してください: 左チャンネル(L と Ls)からの低周波は最初のサブウーファー(S1)に送られ、右チャンネルからの低周波は2番目のサブウーファー(S2)に送られます。Center チャンネルの低周波は、両方のサブウーファーに等しく送られます。
- **Send LFE to L+R**: このベースマネージメントは、サブウーファーがない場合に使用します。プロセッサは、LFEチャンネルを L と R のスピーカーに等しく送ります。事前に、モニターがLFEを再生するために必要な追加のパワーを処理できる能力があることを確かめてください。

重要な注意: 特にポート付きの ベースドライバーを使用している場合、オーバー エクスカーションでウーファーを損傷しないよう、適切なハイパス フィルター(**Target Curve** カーブまたは **Advanced Settings**)を設定してください。

Please note:

- ベースマネージメントは、Calibration の前でも後でも設定することができます。計算を必要とせず、その効果は即座に聴き取ることができます。ベースマネージメントのフィルタリングは、Optimizer グラフには表示されません。
- ベースマネージメントには4次バターワースフィルターが使用されています。
- ベースマネージメント・モードは、プロファイルで制御できます。
- **Use config editor** ボタンは、ベース マネージメント設定がXMLファイルで定義されていた旧バージョンとの後方互換性のために使用されます。

ディレイライン

ディレイラインは、Optimizationの影響を受けることなく、Trinnov Processorの出力で追加のオーディオモニターシステムを遅延させるために提供されます。

ディレイラインは、通常、放送局において、オーディオとビデオのコントロールルーム間のオーディオモニタリングの位置合わせに使用されます。

Speaker ページでディレイラインを作成すると、次の例のようにソースとスピーカーのルーティンググリッドに設定することができます。

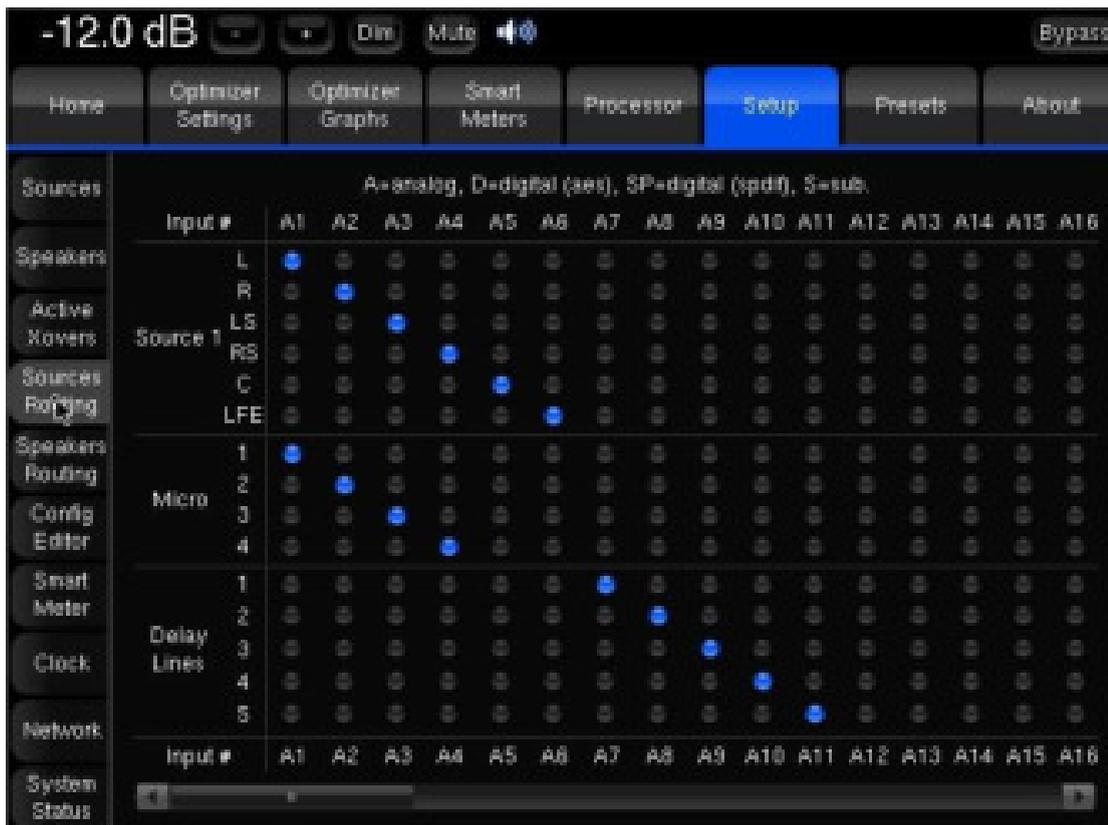
以下の例では、5.0モニターシステムとTrinnov Optimizedスピーカーの位置を合わせるために、5本のディレイラインを作成しました。

最初のスクリーンショットは、結果としてSources Routingグリッドに5本の追加ラインが作成されたことを示しています。入力1から5はアクティブなソフトウェアソースに、入力6から10はディレイラインの出力にルーティングされる代替ソースとして影響を受けています。

メインソースのミラーリング出力を設定するには、代わりにInputs 1から5を選択します。

Speakers Routing ページで Delay Lines の Outputs を選択すると、先に選択した Delay Lines の Inputs が送られる Outputs が定義されます。

この例では、Inputs 6 から 10 は Outputs 6 から 10 にルーティングされています。





入力と出力のレベルおよび追加ディレイを手動で個別に調整することができます。
 ソロとミュートの機能は Outputs と Inputs のページにあります。これはリマッピングが有効な場合、結果が異なるからです(この場合、1つの入力信号が複数のラウドスピーカーに供給されます)。
 もう一つの典型的な使い方は、LFEチャンネルの入力に+10dBを設定することです。
 これらの設定は、Setup/Presetsページでプリセットとして保存されます。